

定例会記録

2016. 5. 13

記録：原

幼稚園の保育実践を映像で見ながら討論をしました。

ピアノのリズムに合わせて、何が始まるのかな？と期待感を高める活動から入り、体全体を使って楽しむ。徐々に友だちともコミュニケーションをとる活動がありました。

指導案には、気になる子どもの個別の目標も記されており、一人ひとりをみておられる様子が伝わってきました。

活動の中で、女の子、男の子と分けて活動している場面がありましたが、それはジェンダーバイアスがかかり、かわりに制限が加わる。男女共生の観点からも、生きにくさを感じる子どもを育てることになりかねないのではないかという意見がありました。

友だちを応援する姿や優しいかわりの場面もありましたが、そこへの評価は弱いところでした。やってあげようというような上からのかわりではなく、お友だちが困っているから手伝おう、声をかけようという、純粹で心温まる姿でした。

その他にも、上手だった、早くできたような評価はありましたが、かわりをほめる部分は少なかったように思います。その評価こそ子どもたちのつながりを生むものになります。

5歳児クラスでは、様々な種類の粘土を教材とした保育をされていました。個別対応は多かったのですが、それを全体化するような指導は、少なかったように思います。「先生見て」という教師への子どもの声も、それを表していると言えるでしょう。

活動が進み、子どもたちの発想はとめどなく発展したり、逆に行き詰まったり…。そんな時こそ、友だちの作品を紹介したり、新しい道具を渡したり、新たな設定の声かけをしたり、子どもに尋ねたり…が必要であったと思います。

子ども同士のかかわりを一つのねらいにしていますが、そこでとどまっているように感じました。かかわることから共同や新たなふれ合いを生み出すことがねらいであるべきではないでしょうか。

混乱しないようにしたい、極端に言うとコントロールしたいという教師の思いが出ることがあります。しかしそれは、予想し得ない自由な発想や行動、不規則な発言に対応できないことになります。偶然性を排除し、教師の望んだ答えを探して発言する子どもを育てることになります。当然、しんどい子どもはその流れに乗れません。

何でも言える授業、誰もが発言できる学級、そこから生まれるできる子としんどい子の逆転現象。そうやって授業や学級はつくられていくことを子どもたち自身が実感することを目指しているのが学習集団ではないでしょうか。